

恵比寿映像祭2023

開催概要・新たな事業展開及びテーマ発表



恵比寿映像祭2023 「テクノロジー？」

令和5年2月3日（金）～2月19日（日）《15日間》月曜休館

*コミッション・プロジェクト（3F展示室）のみ、3月26日（日）まで開催

会場 東京都写真美術館、恵比寿ガーデンプレイス センター広場、地域連携各所ほか

時間 10:00～20:00（2月19日は18:00）※入館は閉館の30分前まで

TOP MUSEUM

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

恵比寿映像祭2023について

**アートと映像の表現プラットフォームとして、新たな事業がスタート。
映像文化の創造と紹介・体感の場としてのフェスティバルが、さらに活性化！**

恵比寿映像祭では、映像という言葉に限定的に用いるのではなく、映像をめぐる様々な選択肢に目をむけ、多様化する映像表現と映像受容の在り方を、あらためて問い直してきました。芸術と映像が人にもたらしうるオルタナティブな価値観（ヴィジョンズ）の生成を促し、存続させていくためのプラットフォームとして、発信を続けています。

毎回、テーマや「映像とは何か」という問いを投げかけながら、国内外の映像表現を紹介してきた10年以上の歳月のなかで、映像を取り巻く状況は大きく変化してきました。

このような映像をめぐる社会状況の変化のなかで、「映像とは何か」という問いを引き続き深めていくために、15回目を迎える恵比寿映像祭2023からは、「コミッション・プロジェクト」をはじめとする、いくつかの新たな試みを開始することで、継続的なプラットフォームとしての映像祭の役割をさらに強化していきたいと思えます。

※今年度より、実施回数を掲げる名称から実施年の西暦表記へ変更となりました。

恵比寿映像祭とは

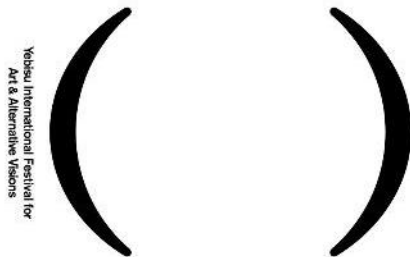
恵比寿映像祭は、平成21（2009）年の第1回開催以来、年に一度恵比寿の地で、展示、上映、ライブ・パフォーマンス、トーク・セッションなどを複合的に行なってきた映像とアートの国際フェスティバルです。映像分野における創造活動の活性化と、映像表現やメディアの発展をいかに育み、継承していくかという課題について広く共有する場となることを目指してきました。

ロゴについて

映像をめぐる、ひとつではない答えをみんなで探していこう！という「恵比寿映像祭」の基本姿勢を、オープンなフレームとしてのカッコに託しました。

—— 映像というカッコにあえて入れてみることで、
はじめて見えてくるものがある

何かを限定するためではなく、いろいろなものを出し入れして、よく見てみるためのカッコです。



開催概要

名称 | 恵比寿映像祭2023「テクノロジー？」
Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2023, "Technology?"

会期 | 令和5年2月3日（金）～2月19日（日）《15日間》

時間 | 10:00～20:00（2月3日～2月19日／2月19日は18時まで）
*それぞれ入館は閉館の30分前まで

休館 | 毎週月曜日

*なお、コミッションプロジェクト（3F展示室）のみ、3月26日（日）まで開催
時間は、10:00～18:00（2月21日～3月26日／木金のみ20:00まで）

会場 | 東京都写真美術館／恵比寿ガーデンプレイス センター広場／地域連携各所ほか

料金 | 入場無料
※一部のプログラム（上映・イベントなど）は有料
※オンラインによる日時指定予約を推奨します

主催 | 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／日本経済新聞社

共催 | サッポロ不動産開発株式会社

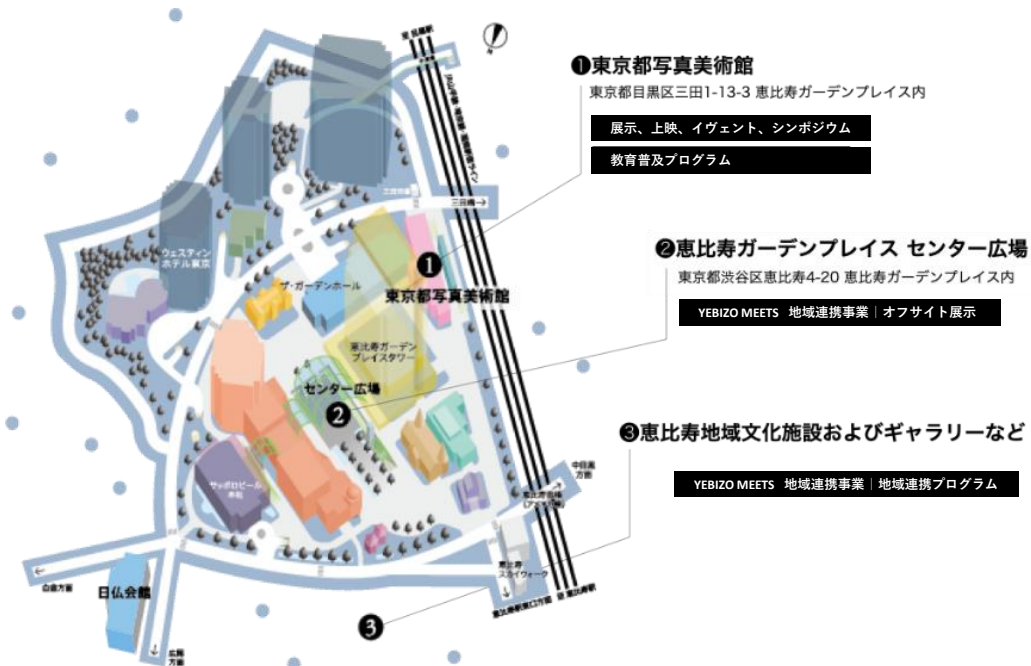
後援 | J-WAVE 81.3FM

協賛 | 東京都写真美術館支援会員

公式HP | www.yebizo.com

公式SNS | Twitter : twitter.com/topmuseum/ Instagram: [instagram.com/yebizo/](https://www.instagram.com/yebizo/)

会場構成（予定）



恵比寿映像祭の新たな視点 — 3つの事業展開

継続的なプラットフォームとしての恵比寿映像祭の新しい試み
— 「映像とは何か」終わりのない問いを続けるために

1. 「恵比寿映像祭 コミッション・プロジェクト」 — 本邦初公開の映像体験から新しい出会いの場を

日本を拠点に活動するアーティストに制作委嘱した映像作品を「新たな恵比寿映像祭」の成果として発表し、将来的に国内外の文化施設や文化組織で発信することで、アーティストの創造活動を支援するスキームを作っていきます。

恵比寿映像祭が培ってきた国内外のネットワークを活用し、新しい技術や表現方法だけでなく、各ライフステージのなかで挑戦を続ける多様な作家たちから候補者を選出し、そのなかでも特に独創性に富み、「新たな恵比寿映像祭」を牽引する可能性のある優れた新進4作家を、国内外の有識者による選考を経て決定します。4作家により制作された作品は「恵比寿映像祭2023」開幕より1カ月半にわたって展示され、そのなかから特別賞を選出します。

参加作家のみならず、映像表現を行う様々なライフステージにいるアーティストを刺激し、創造活動を活性化させるとともに、本邦初公開の映像表現との思いもよらぬ出会いの場を創出していきます。

将来的にこの「コミッション・ワーク」を国内外の文化施設での発表につなげ、より多様な観客の方々が、映像作品のクリエイションに親しみ、楽しむことを目指します。

2. 最新技術の実践、協働の場としての恵比寿映像祭

映像技術の世界では、日タイノベーションが起きています。一見して理解できる新しい表現もあれば、プロセスのなかに潜むイノベーションもあります。恵比寿映像祭は、幅広い可能性を実現するため、新しいテクノロジーの実験やその協働の可能性をより積極的に追求していきます。

恵比寿映像祭2023は、シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT] *における「アート・インキュベーション・プログラム」のアーティスト・フェローによる作品をオフサイト会場で展示します。

(注記) *2022年10月23日開設、デジタルテクノロジーの活用を通じて人々の創造性を社会に発揮するための活動拠点。ラボ、スタジオ等のスペースを備え、ワークショップやアーティストによる創作活動などの様々なプログラムを通じて、東京からイノベーションを生み出す原動力となっていきます。 <https://ccbt.rekibun.or.jp/>

3. 東京都写真美術館における年間を通じたテーマ展開 — 映像というテーマをより多角的に深めるために

これまで恵比寿映像祭は、「映像とは何か」という問いに総合テーマを設定し、ひとつではない答えを投げかけ、作り手・受け手がともに楽しみながら映像について考える機会となりました。一方、東京都写真美術館では、毎年映像展を開催し、美術館のコレクションなどを通して、映像への問いを歴史や哲学に結びつけて触れてきました。

これからの恵比寿映像祭をより楽しんでいただくために、東京都写真美術館では、映像展をはじめ年間を通じて「映像とは何か」という問いについて考え、体験するための機会を提供する場となることを目指します。

コミッション・プロジェクトについて

恵比寿映像祭2023は、東京都写真美術館の新たな基幹事業として、国際発信及び都民への新たな文化価値をもたらすことを目的に、制作委嘱事業「コミッション・プロジェクト」を実施します。

恵比寿映像祭でこれまでに構築した国内外のネットワークを活用し、日本を拠点に活動する新進作家4名を選出します。制作委嘱した映像作品を「新たな恵比寿映像祭」の成果として発表し、将来的に国内外の文化施設や文化組織で発信することで、作家の創造活動を支援するスキームを作っていきます。

映像表現に通じた国内外の有識者5名が審査委員となり、選出された4名は東京都写真美術館3階展示室で新作を発表します。また、公開された作品から、審査委員による二次審査を行い、会期中に特別賞を決定します。

1. 審査委員

沖啓介（メディア・アーティスト、東京造形大学特任教授）

齊藤綾子（映画研究者、明治学院大学教授）

レオナルド・バルトロメウス（山口情報芸術センター[YCAM]／Gudskul Ekosistemキュレーター）

メー・アーダードン・インカワニット（映画・メディア研究者、キュレーター、ウェストミンスター大学教授）

田坂博子（東京都写真美術館学芸員、恵比寿映像祭キュレーター）

*審査運営事務局：特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト]

2. 作家選考条件

- 1：恵比寿映像祭ならびに東京都写真美術館で構築されてきたネットワークを拡張していくことができる作家であること。
- 2：新しい技術や表現方法だけでなく、各ライフステージのなかで多様な挑戦を実現できる作家であること。
- 3：現在、日本を居住地として活動している作家であること。

3. 委嘱作家作品の選定基準

- 1：独創性に富み、企画、内容及び技法が総合的に優れた映像作品であり、恵比寿映像祭での展示を実現できる計画性を有していること。
- 2：新しい技術や表現方法だけでなく、映像表現の概念を拡張し、映像史に位置付けていくことが可能な作品であること。
- 3：作品自体に、海外へ発信していくことができる固有性や接続性を有していること。

コミッション・プロジェクト | 選出作家4名について

国内外から選出された5名の審査委員によって審査会*が開催され、以下の4名の作家による新作制作委嘱が決定しました。会期中、東京都写真美術館3F展示室にてお目見えます。乞うご期待！

*約300名の候補者から東京都写真美術館及び事務局で厳選し、1次審査を開催しました。

3F展示室 | コミッション・プロジェクト事業

荒木悠 | ARAKI Yu



ワシントン大学で彫刻を、東京藝術大学では映像を学ぶ。日英の通訳業を挫折後、誤訳に着目した制作を始める。英語圏において、「 casting」と呼ばれていることを起点に、オリジナルからコピーが作られる過程で生じる差異を再現・再演・再生といった表現手法で探究している。2018年はアムステルダムのライクスアカデミーにゲスト・レジデントとして滞在。2019年フューチャージェネレーション・アートプライズのファイナリストに選出。2020-21年度アーツコミッション・ヨコハマU39アーティストフェロー。
<http://yuaraki.com/>

葉山嶺 | HAYAMA Rei



野生動物や環境問題と深く関わる特殊な環境で幼少期を過ごす。多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科で学び、2008年より映像制作を始める。自然と人間との調和を求める彼女の作品は、人間中心の視点から失われたり、無視されたりする自然や生き物を中心に展開され、人間には見ることができない「自然の現実の層」を人間の想像力の中に浮かび上がらせる。近年では、Bonner Kunstverein(ドイツ)、National Gallery of Zimbabwe(ジンバブエ)、Jeu de Paume(フランス)、Sifang Art Museum(中国)、釜山ビエンナーレ2020、NTTインターコミュニケーション・センター [ICC] (東京)、Empty Gallery (香港)などで展示・上映されている。<https://www.reihayama.net/>

金仁淑 | KIM Insook



韓国の漢城大学芸術大学院西洋画科写真映像コースに留学後、15年間のソウル暮らしを経てソウルと東京を拠点に制作活動を展開。「多様であることは普遍である」という考えを根幹に置き、「個」の日常や記憶、歴史、伝統、コミュニティ、家族などをテーマに制作を行い、写真・映像を主なメディアとして使用したインスタレーションを発表している。2008年に光州市立美術館で個展「sweet hours」を開催。韓国国立現代美術館や、ドイツ・デュッセルドルフ市などが運営するアーティスト・イン・レジデンスで滞在制作を行い、大邱フォトビエンナーレ、森美術館(東京)、東京都写真美術館など、国内外の芸術祭や企画展で作品を発表する。

大木裕之 | OKI Hiroyuki



東京生まれ。高知県、東京都、他各地拠点。東京大学工学部建築学科在学中の80年代前半より映像制作を始める。1990年にイメージフォーラム・フェスティバル審査員特別賞を受賞、1996年第46回ベルリン国際映画祭ネットバック賞を受賞。その表現活動は映像に留まらず、ドローイング、インスタレーション、パフォーマンスにまでおよぶ。世界各地を移動しながら生活と哲学の相関関係を探り、動的ネットワークで複雑に構成される世界を描き出す。独特で詩的な映像表現は国内外で高く評価され、国際展および映像祭に多数参加。

オフサイト展示

東京2020オリンピック・パラリンピックの公式エンブレムを手掛け、開会式のドローン演出を実現させた野老朝雄（ところ・あさお）らによる、テクノロジーとの融合による映像インスタレーションを展示！

恵比寿ガーデンプレイスセンター広場 | 地域連携事業

野老朝雄、平本知樹、井口皓太 FORMING SPHERES

東京2020オリンピック競技大会の開会式では、ドローンにより球体の組市松文様が空中に表現された。本プロジェクトは、菱形三十面体から生成した百二十面体の各面に長方形を嵌めることで表現されたこの球体を、新たにインスタレーションとして再構築するものである。

開会式のドローン演出を手がけたメンバーである、エンブレムをデザインした野老朝雄、デジタル・ファブリケーションの技術を使って廃プラスチックを材料として表彰台を制作した平本知樹、そして「動くスポーツピクトグラム」をデザインした井口皓太が協働。変化に富んだ映像を生み出すインスタレーションを発表する。

※本作品は、この秋10月23日に渋谷東武ホテル地下2階にオープンするシビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT] における「アート・インキュベーション・プログラム」のアーティスト・フェロー活動の一環として制作される予定です。



野老朝雄 | TOKOLO Asao



美術家

1969年東京生まれ。幼少時より建築を学び、江頭慎に師事。2001年9月11日より「つなげること」をテーマに紋様の制作を始め、美術・建築・デザインなど、分野の境界を跨ぐ活動を続ける。単純な幾何学原理に基づいた定規やコンパスで再現可能な紋と紋様の制作や、同様の原理を応用した立体物の設計／制作も行っている。主な作品に東京2020オリンピック・パラリンピックエンブレム、名古屋ビルディング下層部ガラスパターン、TOKOLO PATTERN MAGNETなど。2016年より東京大学工学部非常勤講師、2018年より東京大学教養学部非常勤講師を務める。

平本知樹 | HIRAMOTO Tomoki



空間デザイナー／建築家

1987年生まれ、慶応義塾大学大学院(SFC)政策・メディア研究科エクスデザイン専攻修士課程修了。学生時代にFabLab Japanの発足に携わり、2015年にwipを設立。デジタル技術を駆使しプロダクトから空間デザインまでスケールを横断したデザインを行う。東京2020オリンピック・パラリンピックでは、表彰台プロジェクトを手がけ、オリンピック開会式ではドローン演出3Dアニメーション制作にも加わった。書籍『3D Printing Handbook/オンラインージャパン』の執筆やデザイン誌で連載などを行う。

井口皓太 | IGUCHI Kota



映像デザイナー／クリエイティブディレクター

1984年生まれ、NYと東京を拠点に活動。2008年武蔵野美術大学基礎デザイン学科在学中に株式会社TYMOTEを設立。2013年にクリエイティブアソシエーションCEKAIを設立。動的なデザインを軸に、モーショングラフィックスから実写映像監督、また、チームビルディング型のクリエイティブディレクションを得意とする。2020年にはオリンピック・パラリンピック大会史上初となる「東京2020 動くスポーツピクトグラム」の制作を担当。開会式典ではVideo Directorとして参画し、ドローン演出3Dアニメーション等を制作している。

恵比寿映像祭2023

テクノロジー？

Yebisu International Festival for
Art & Alternative Visions 2023

Technology ?

私たちが日常目にする映像技術である、写真、映画、ビデオやアニメーション。これら映像表現のテクノロジーは、19世紀以降、大きく発展し、今日では高解像度のイメージや、より長時間の映像を処理することができるようになりました。映像技術は、より高精細で、より情報量の多いイメージを作ることを目指して発展してきたと言っても良いかもしれません。

技術には、一般化されて広く共有され、定着していくという側面がありますが、共有されるための規範は、誰が、いつ、どのように決めるのでしょうか？ 今当たり前に見ている高精細の映像が、100年後にどのようなリアリティとして受け止められるのかは誰も予測できません。歴史を振り返ったとき、技術が思いがけない要素として働いていた、ということを見出すことがあります。例えば、高解像度の映像の中に、あえて手作りの感触を含めることで、臨場感を高めるなど、時にアーティストの表現は、そうした技術の対話の中から生み出され、思いもよらない発見をする可能性を持っています。

恵比寿映像祭2023では、「テクノロジー？」というテーマを通して、多種多様な映像表現の実践を検証し、アートと技術との対話の可能性を考察していきます。

構成 | トークやイベントなど、多種多彩なプログラムを開催！

トーク・セッションやパフォーマンス、イベントなどを開催。展示や上映だけではない様々な形式で映像文化の楽しみ方や理解を深める場をお届けします。

※個別プログラムの詳細情報は11月末に発表予定です。下記の情報は現時点での概要となります。

➤ コミッション・プロジェクト | 東京都写真美術館3F展示室

国内外の審査委員により選出された新進作家4名が、恵比寿映像祭に併せて、新作制作に臨みます。自由で新たなプロジェクトをぜひお楽しみください。この展示は3月26日までご覧いただけます。

➤ 展示 | 東京都写真美術館2F・B1F展示室

総合テーマ「テクノロジー？」を軸に、東京都写真美術館の2F、B1F、2つの展示室で、多様な現代作家の作品群や美術館の収蔵作品などを体験いただけます。

➤ 上映 | 東京都写真美術館1Fホール

東京都写真美術館1Fホールを会場に、恵比寿映像祭のために特別に編まれた上映プログラムを連日お届けします。劇映画から、実験映画、ドキュメンタリー、アニメーション、現代美術作品まで、日本初公開作品を含め、国内外から多様な作品が集います。上映後には、監督やゲストを招きトーク・セッションを開催します。

➤ ライブ・イベント | 東京都写真美術館2F・ロビーほか

東京都写真美術館1Fホールや2Fロビー、2F展示室を会場に、従来の映像の枠を超えたパフォーマンスを行います。いつもとは違う美術館での新しい体験をお楽しみください。

➤ 教育普及プログラム | 東京都写真美術館1Fスタジオほか

教育普及プログラムは、多様な方が参加しやすいプログラムをはじめ、恵比寿映像祭をより身近に、より深く楽しんでいただくため、様々なプログラムをご用意しています。

➤ YEBIZO MEETS 地域連携事業

多くの人々が多様な映像表現に触れる「開かれた」機会として、おなじみのYEBIZO MEETS。館を飛び出し地域の映像及びアートの担い手と映像文化を紹介・体感するプログラムです。恵比寿ガーデンプレイスセンター広場でのオフサイト展示や恵比寿近隣地域に位置する各所文化施設やギャラリーとの連携などにより開催します。

➤ オフサイト展示 | 恵比寿ガーデンプレイスセンター広場

恵比寿ガーデンプレイスの中心に位置するセンター広場には、訪れた人々すべてに体験可能な屋外作品が登場します。恵比寿映像祭2023では、シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT] における「アート・インキュベーション・プログラム」のアーティスト・フェローによる作品を展示します。

➤ 地域連携プログラム | 地域連携各所

地域連携プログラムでは、各施設が恵比寿映像祭会期中に展覧会及びイベントを開催します。地域で活躍するアートの担い手たちと行う「地域連携プログラム」や地域をめぐるシールラリーなどを通じて、フェスティバルを楽しむきっかけをつくります。街歩きとともにお楽しみください。

プログラムの詳細は決定次第、恵比寿映像祭公式ウェブサイト（www.yebizo.com）で発表いたします。

プレスリリース／広報用画像／ご取材に関するお問い合わせ

このリリースのお問い合わせ先

恵比寿映像祭広報担当（共同ピーアール株式会社）：田中（たなか）、安田（やすだ）
TEL：03-6264-2382／FAX：03-6700-5620／E-mail：yebizo2023-pr@kyodo-pr.co.jp
携帯：080-8866-6183（田中）、090-7909-5164（安田）

※本リリース内で使用している写真を広報用画像としてご用意しています。

広報用図版申請フォーム：<https://tayori.com/f/yebizo2023/>

より申請をいただくか、

①ご所属 ②貴媒体名 ③掲載予定時期 ④ご希望画像の作家・作品名などを記入のうえ、
上記のプレス担当者までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプション及びクレジットの表記をお願いします。

* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

※諸般の事情により、開館時期・内容等を変更する場合がございます。

展览会等の詳細、最新の情報は映像祭ホームページをご確認ください。

恵比寿映像祭公式ホームページ：<https://www.yebizo.com>

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

TEL：03-3280-0099 / FAX：03-3280-0033
